

駒ヶ根市文化財

名称	守屋貞治の石仏
種別	美術工芸品(彫刻)
説明	<p>守屋貞治(もりやさだじ)は明和2年(1765)高遠領塩供村(現在の高遠長藤)に生まれた。高遠領内では伝統的に多くの優れた石工が輩出している。貞治の修業時代、どこで誰について修業したかは不明であるが、関西方面に出て石匠について技術を磨いたと云われている。しかし、近年の調査・研究によって祖父の「貞七」も高い技術を持った石工であったことが分かって来ており、貞治は貞七より石工の技術を習得したものとする説も出てきている。</p> <p>貞治は研鑽期、上諏訪の温泉寺の願王和尚との知遇によって石工としての心得や、仏教の教えを得たのである。北関東および関西の広域に亘って貞治の石仏が遺っているのは、願王和尚と共に、臨済宗妙心寺派の寺々を訪れ、石仏を造立したためとされている。</p> <p>貞治の作風は、端正・優美で写実的である。そして、念仏を唱えながら彫造したため、一体、一体の石仏に佛心が込められていると云われている。</p> <p>守屋貞治が生涯に刻んだ石仏は、彼自身が晩年に記述した「石佛菩薩細工帖」により、336体が記録されている。しかし、これに記録されていないものも近年の研究によって明らかになってきている。駒ヶ根市以外に遺る貞治の作品の多くは、西国、坂東、秩父などの三十三カ所の観音霊場にちなんだ三十三所観音(温泉寺、山梨県海岸寺、伊那市高遠建福寺など)が多い。</p> <p>駒ヶ根市内で確認される作品は、細工帳の一番と天保3年(1832)の絶作を含めて30数基であり、このように単体での貞治仏が多く遺されているのは、駒ヶ根の地しかない。このことは光前寺の寂應和尚との関係が深いとされている。</p> <p>「石仏師 守屋貞治」※1)『別冊信濃路』によると、「温泉寺の願王和尚は光前寺の寂應和尚とは宗旨を超えて深い親交があり、貞治を一人立ちさせるために光前寺の寂應和尚の庇護下に入れ、上穂の近くに仮寓を設けた」とされている。</p> <p>以下、市内に遺る貞治の作品の中から代表的なものとして3点を挙げておく。</p> <p>※1)『別冊信濃路』「石仏師守屋貞治 美と信仰を貫いた信州が生んだ日本の名工」</p> <p>編集・発行者:伊澤和馬 発行所信濃路出版株式会社 昭和61・1・11発行</p>



左：福沢家の准胝
観音菩薩
中：善福寺の准胝
観音菩薩
下：光前寺の三陀
羅尼塔

駒ヶ根市文化財

名称	1) 福沢家の准胝観音菩薩
所在地	赤穂福岡(屋号:福岡西の墓地入口)
所有	福沢家
説明	<p>石材は青石で蓮華座の上の像の高さは 69cm を測り、丸彫りの准胝観音(じゅんていかんのん)が鎮座している。後手には、剣・鈴・独杵・宝珠・蓮華・法輪・経巻などを持つ。台座に文化 4 年(1807)とあり、貞治 43 歳の時の彫像である。技量が充実した円熟期に入りかけた頃の作品である。貞治の独特の作風である口元円形微笑型で温和な表情を浮かべている。頭髪のまとめ方、蓮弁の繊細さなど、貞治仏の特徴をよく表す傑作の一つである。</p>
名称	2) 善福寺の准胝観音菩薩
所在地	東伊那 6174(善福寺裏山)
所有	善福寺
説明	<p>同じく准胝観音であるが、福岡西の作品との違いは、円形光背が彫られていることであり、この作風から少し古い彫造時期が推察される。善福寺三十三観音造立の年代を考え合わせると、文化初年頃の作と推定される。山腹の巨石の上に蓮華を型どった支柱を設けて台座とし、その上に総高 43cm の優美な姿を出現している。自然のたたずまいの中、見事に調和している。</p> <p>なお円形光背の裏面の記銘には「施主羽場小町谷吉英」とある。吉英は赤穂上穂の豪農で信仰心が篤く、桃沢夢宅門下の歌人でもあった。羽場小町谷家は、祖父以来三代に渡る石工仕事を通じての縁ある家柄であった。</p>
名称	3) 光前寺の三陀羅尼塔
種別	有形文化財(建造物)
指定	市・有形文化財(平成 29.7.25)
所在地	赤穂 29-1
所有	光前寺
説明	<p>享和 3 年(1803)に本堂をはじめ三重塔などの主要伽藍を焼失した為、文化元年より再建にとりかかり、成就したのが文化 7 年(1810)であった。再建復興事業の完了を記念して、山主寂応が文化 8 年に建立したのがこの石塔である。</p> <p>座右の銘文は、寂応和尚によるもので、再建の経過を詳細に記した光前寺の歴史を伝える貴重な文化財である。守屋貞治の石仏彫造の中でも、石塔の彫刻はこの三陀羅尼塔以外にはなく、彫枝の素晴らしさから、南信の貞治仏の中でも傑作のひとつである。</p>